学園長だより 第24回

言問の鐘

愛知淑徳学園理事長・学園長
小林素文

愛知淑徳は本年4月、創立115年目に入ります。

西新町での創業の1年に始まり、東新町時代は発展の22年、池下時代は戦争をはさむ激動の31年。

それぞれの地での尊い日々を経て1959年に移転した、ここ星が丘での月日も60年となり、学園の歴史の半分以上を占めるようになりました。

＊

60年前、中日新聞の記事で『東洋一の校舎』と称えられた、ブランドニューの新校舎の塔屋には、「卒業生の心を込めた鐘の音がかなでられるように」と、同窓会から贈られた4つの鐘が備えられました。

大は60センチ、小は30センチの鐘は、それぞれ「愛の鐘」「知の鐘」「淑の鐘」「徳の鐘」。そして、その総称は「言問の鐘」と名付けられました。

「ことと い」の由来は、在原業平の「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと（都という名をもっているなら、さあ、尋ねよう、都鳥よ。都にいる私の恋い慕う人は無事でいるかいないのかを）」にあります。

卒業生は母校での青春時代をなつかしみ、在校生はまことを究めんと問い尋ねている。そんな、いつの時代も変わらない学園風景を、鐘の音に託したのです。

＊

「言問の鐘」は、新天地星が丘学舎で、朝、昼、夕と3回、休むことなく打ち鳴らされていましたが、いつしか老朽化し、シンボルとして存在するだけになりました。

「東洋一」の校舎も、老朽化します。全面修理か建て替えか、の迷いは、阪神大震災によりふっきれ、学園100周年の記念事業として、安心・安全を第一に、中高校舎を一新することにしました。

2006年3月に完成した真新しい校舎の屋上には、完全修復された、「言問の鐘」が備えられました。

以来、毎夕5時に4つの鐘の音が星が丘学舎に鳴り響いています。

＊

涼しさや鐘をはなるる鐘の声
（与謝蕪村）

鐘の音は夏には夏の余韻。

カリヨンの鳴りわたりゆく秋の風
（水田清子）

秋には秋の響きがします。

季節により、世代により、響きが異なって感じられる同じ鐘の音が幾世代にわたり鳴り続けていること、これも大切な伝統です。

＊

北海道のサロベツ原野にある兜沼のほとりに「言問の松」があります。樹齢1200年の木は土地の守り神。「ことと い」の名は、この老樹に昔のことを尋ねると何事も語ってくれる、と信じられたことに由来しています。

「言問の鐘」も、星が丘学舎のことなら何でも語ってくれるようになりましょう。